



| | |
|--------------|---|
| Title | 国際法模擬裁判世界大会出場に向けた取り組みと国際法の実践的な研究 |
| Author(s) | 小笠原, 健 |
| Citation | 平成27年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2016 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/54695 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

平成 27 年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

| | | | | | |
|--|---|----------|-----------------|--------|-----|
| ふりがな 氏 名 | おがさわら たける 小笠原 健 | 学部 学科 | 法学部 法学科 | 学 年 | 2 年 |
| ふりがな 共 同 研究者名 | たにぐち ゆうし 谷口 勇士 | 学部 学科 | 法学部 国際公共政策学科 | 学 年 | 2 年 |
| | いしはら りょう 石原 凌 | | 外国語学部 ロシア語専攻 | | 2 年 |
| アドバイザー教員 氏名 | 村上 正直 | 所属 | 国際公共政策研究科 | | |
| 研究課題名 | 国際法模擬裁判世界大会出場に向けた取り組みと国際法の実践的な研究 | | | | |
| 研究成果の概要 | 研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。 | | | | |
| 研究目的 ①着想に至った経緯 <p>現代の国際社会には、IS に関わる問題、シリア問題、テロ問題、本国に関しては拉致問題、TPP、領土問題など、様々な問題が存在する。こうした問題に関わり取り組むためには、国際法に精通すること、柔軟な思考能力、英語を使用しコミュニケーションを行う能力等を向上させることが求められている。</p> <p>そこで、7 月に行われる JAPAN CUP(日本語弁論)及び 2 月に行われる JESSUP CUP 国内予選(言語を使用する能力の必要性から英語弁論が導入されている)への参加と大会に向けた準備を通して英語能力を向上させ、国際法の諸問題について知見を広める。これらの大会には多数の大学が参加し、加えて JESSUP CUP では国内予選を勝ち抜いたチームが翌年春にワシントンで開催される世界大会へ出場できる。</p> ②本研究の意義 <p>この研究の意義は次の 2 点にある。<u>I.) 国際社会の諸課題を法的に解釈し、国際法を適用する実践的能力等を獲得すること、II.) 社会で普遍的にもとめられる語学力、資料検索能力、プレゼンテーション能力などを獲得すること、</u>である。</p> <u>I.) 国際社会の諸課題を法的に解釈し、国際法を適用する実践的能力等の獲得</u> <p>国際法模擬裁判を通して国際法に関する学術的知識、法的思考力を習得できる。論作成においては、問題に対して自ら設定した法規範を事実在即し当てはめる実践的能力が養成される。また論作成を通して多くの学説、事例を知ることによって一つの問題を様々な観点からとらえ、法的に解釈</p> | | | | | |

し考察する力が養われる。

II.)社会で普遍的に求められる能力の獲得

論作成や弁論を通して、英語論文を含む資料を探索する能力、プレゼンテーション能力、語学力の向上が目指せる。特に口頭弁論では、限られた時間内で裁判官に対して自らの主張を行わなければならない。そのため論理的に一貫した主張を端的に行うこと、自らの主張に説得力を持たせて正確に伝えることが求められる。よって論理的思考力に加え、自分の意見を相手に適切に伝え納得させる技術の向上を養う。また英語弁論で行われる JESSUP CUP では英語弁論技術向上も目指す。

③本研究の達成目標

JAPAN CUP、JESSUP CUP 国内予選に参加して上記能力の獲得を目指し、その上で来春ワシントンで行われる JESSUP 世界大会への出場を目指す。

研究方法・研究計画

大会で行われる模擬裁判は、①メモリアルの作成、②大会での口頭弁論の2つによって構成されている。

①メモリアル作成

メモリアルとは原告・被告国がそれぞれ自国の主張の大筋をまとめる準備書面である。問題発表後、最初に問題文を読んでメンバー全員で論点を明確化して理解を深め、議論の下地となる共通認識を持つ。その後メンバーを原告、被告ごとに分けそれぞれで論を作成する。論作成の過程において問題文の緻密な事実解釈と国内の日本語文献だけでなく海外の学術論文や国際機関の文書等英語資料も熟読し、メンバー内で論の妥当性について議論を交わす。こうして洗練された論を JAPAN CUP では日本語、JESSUP CUP では英語で文書化する。

②大会での口頭弁論

大会本番では裁判官の前で口頭弁論を行い、論理の整合性、法的知識、事実の認識、時間の運用力を基準に競われる。大会に向けて自分の意見に説得力を持たせ、端的かつ適切に相手に伝える練習、裁判官からの質問に迅速かつ的確に応答する練習を積む。また英語弁論で行われる JESSUP CUP では英語弁論技術も学ぶ。さらに弁論練習終了後に行う議論を行い、より完成された論の作成、口頭弁論の形を求める。

7月のJAPAN CUP、2月のJESSUP CUP 国内予選の2つの大会においてそれぞれ上記の活動を行う。最終目標であるJESSUP CUP 世界大会出場に向けて、経験を積み、それぞれの大会で反省点や次に向けて改善すべき点の確認を行っていく。

研究経過・研究結果

1.JAPAN CUP

まず、研究の経過として7月に行われた JAPAN CUP の出場を目指した。上記の研究の手順に基づき、①メモリアル作成、②大会での口頭弁論の2つを主として活動を行った。

①メモリアル作成

4月に JAPAN CUP の問題が発表されて以後、6月にメモリアルの形で提出を行うまで、メモリアル作成を中心に大会準備を進めていった。

問題の内容は、海を挟んで向かい合う低開発途上国である原告国と先進国である被告国の間で起きた問題についてである。両国に挟まれた海において行われた被告国の資源調査についての紛争について問われたものであった。

まず、問題の内容を理解し、その後原告・被告のどちらを担当するかを分け、各パートでメモリアル作成を進めた。JESSUP CUP での論作成の具体的な進め方を考えることを見据えて、各パートでそれぞれ論の作り方、議論の仕方等を工夫し考えて行うという方法を採用した。まず日本語文献から基本的知識の下地を固めることから始め、その後次第に論文、英語文献、過去の判例等の調査へ移行してメモリアルの論を形作り、固めていった。

②大会での口頭弁論

メモリアル作成と並行して、5月末ごろから大会での口頭弁論の準備を始めた。まず実際に大会で弁論をしたい者が校内の予選で競い、大会での弁論者を決定した。口頭弁論の練習として、まず論理の整合性、法的知識、事実の認識等について、裁判官から発される質問に的確かつ素早く答えられるようになるということを主に目指した。また口頭弁論の練習で出た裁判官の質問等を、さらに論作成や弁論への理解を深めるきっかけとした。そうした練習を繰り返すことで説得力があり、論理的で伝わりやすい弁論を形作っていった。また、途中からは時間の制限を設けた練習に移行して説得力を持ち論理的な弁論を如何に端的に行うかという練習を行った。JAPAN CUP の弁論自体は日本語であるので、この大会の弁論においては、言語力というよりは専ら法的思考力、プレゼンテーション能力等の向上を目指した。

③結果

JAPAN CUP は7月に東京で行われた。大学の総合順位としては、予選で終わってしまったために上位3チームに入ることもかなわなかった。また、メモリアルの順位としても原告被告双方共に上位に食い込むことができなかった。しかし弁論者個人の順位としては、原告で1人が9位、被告で1人が4位に入ることができ好成績が残せている。

大会の結果を全体的に見ると、良かったと言えるものではない。JESSUP CUP へ向けて総合順位を上げるには、メモリアルの完成度を高めてメモリアルの評価の底上げを目指さなければならない。そのためには諸課題を法的に解釈し、国際法を適用する実践的能力の向上をさらに目指していくことが強く求められる。一方で弁論者個人の順位は悪いものではなかった。プレゼンテーション能力の向上が一定 JAPAN CUP において見られた。JESSUP CUP に向けて、さらなる能力の向上、加えてその能力を英語弁論においても反映させる訓練を積まなければならない。JESSUP

CUP へ向けて課題を見つけることが多かった大会となった。

2.JESSUP CUP

9 月に JESSUP CUP の問題発表が行われて以後、JESSUP CUP へ向けた取り組みを開始した。こちらにも ①メモリアル作成、②大会の口頭弁論 の 2 つを主な活動として行う。また現在 2 月の国内予選へ向けて活動を行っている最中である。

①メモリアル作成

9 月に大会で問題が発表されて以後メモリアル作成を中心に大会準備を開始した。JESSUP CUP は JAPAN CUP とは違い、英語弁論の大会であり、発表される問題文も英語の文章である。そのため、まず問題の概要を読んで理解することに加え、自分たちで非公式の和訳を作ることも行った。

問題の内容としては、国境を接する発展途上国である原告国と先進国である被告国の紛争に関するものである。大規模な電子監視、二国間条約によって原告国に設立された被告国の放送局に関する問題、相手国民の逮捕拘留に関する問題、サイバー攻撃等の内容等が問われた問題となっており、JAPAN CUP よりも論点が多い。

JAPAN CUP と同じく、問題の内容を理解した後に原告・被告どちらを担当するか、原告・被告それぞれの中でさらにどの論点を中心に担当するかを決定し、メモリアル作成を本格的に進めてゆくこととなった。まず日本語文献等で基礎的な部分を固め、その後論文、英語文献、過去の判例等へ調査を広げていった。本大会は英語で執筆したメモリアルの提出が求められるため、次第に英語文献中心の資料探索に移行している。また、メモリアルの執筆に関しても、最初は日本語による執筆も行うが、途中から英語による執筆に一本化している。

②大会の口頭弁論

メモリアル作成と並行して 10 月から口頭弁論の準備を開始した。こちらの大会でも大会で口頭弁論をしたい者が校内予選で競い、大会の弁論者を決定した。

論理の整合性、法的知識、事実の認識等に関する裁判官からの質問に的確かつ素早く答えること、さらにその質問から問題への理解、論作成、法的解釈を深めていく等弁論において求められるものの一般は JAPAN CUP と同様である。しかし本大会は英語による弁論であるため、弁論の練習も英語で行われる。弁論において頻繁に使用する英語の表現を学び、練習を重ねて英語で素早く的確に返答ができるようになることも目指している。今まで身に付けた弁論技術を英語の弁論で生かさなければならない。そのため法的思考力やプレゼンテーション能力の向上だけでなく、言語力向上も大きな目標となっている。

③結果

現在、2 月に京都で行われる JESSUP CUP 国内予選に向けて、上記のメモリアル作成、大会の口頭弁論それぞれの準備を行っている最中である。